安政度内裏遷幸と都市空間

THE EMPEROR'S PARADE TO IMPERIAL PALACE AT ANSEI PERIOD AND THE URBAN SPACE

岸 泰子*

Yasuko KISHI

The parade started at the temporary imperial palace of Katsura and went through the streets where many powerful merchants lived to the Imperial palace at Ansei period. In deciding the course of this parade, Emperor's view "Omikoshi" was important. At the area along this parade course, the environment suitable for "Omikoshi" was created. This parade was carried out to show off the authority of Emperor and the imperial court. On the other, the towns and merchants along this parade course took a lot of doing. However, they were utilizing this parade to build up their social position to invite the customers to the sightseeing.

Keywords : *Emperor's parade, imperial palace at Ansei period, Emperor's view, town, urban space*

遷幸, 安政度内裏, 御見越, 町, 都市空間

はじめに

近世の天皇について、藤田覚氏は次のように解説する¹⁾。

江戸時代の天皇は、禁裏御所から外へ出かける行幸がほとんどなかった。(中略)江戸時代前期の朝覲行幸では、わずかな距離の沿道に棧敷が設けられ、また一七九〇(寛政二)年に、火災で焼け再建された新造禁裏御所へ避難先の聖護院仮御所から戻る光格天皇の行列(遷幸とよび行幸ではない)では、沿道の町屋などに大勢の見物人が出ている。しかし、鳳輦は見えても天皇の姿は見えない。存在はするがその姿は見えない、しかしいったん外にでると多数の見物人がでる、それが江戸時代の天皇だった。

天皇の内裏への遷幸は安政2年(1854)にも行われた(以下、安政度内裏遷幸とする)。後述のように、築地之内にあった仮御所(桂皇居)にいた天皇は、今出川御門を出て、室町通、三条通、堺町通を通過して新造内裏に還る。これを見物するために、寛政度と同様、多くの人々が集まった²⁾。

この内裏遷幸に関しては、建築史学の分野において、寛政度および安政度の沿道のしつらえや町家の特徴に着目した研究の蓄積がある³⁾。だが、これらの研究は遷幸の沿道、町家や築地之内という限定された地区の景観復元に留まっており、都市の祝祭ともいえる遷幸の道筋(経路)の決定の背景や町家の使い方などは明らかにされていない。

一方、近年、立命館大学グローバルCOEプログラムの報告書⁴⁾

(以下、『立命館大学安政度内裏造営報告書』)が発行された。この報告書には、安政度内裏造営・遷幸時に京都所司代をつとめた脇坂安宅の日記である『脇坂安宅日記鈔』(宮内庁書陵部所蔵)や『伝奏口上留』(京都府立総合資料館所蔵)などの史料翻刻と、安政度内裏造営・遷幸の経緯や献金に応じた京都町人の動向に関する論考が所収される。安政度内裏造営・遷幸に関して最も端的にまとめられた最新の研究成果である。ただし、遷幸実施の背景や空間の特性までは明らかにされていない。よって、遷幸の空間の特性や実施の背景などをより総合的に明らかにすることで、祝祭空間となる近世都市京都の位置づけをより明確にしていく必要があると考える⁵⁾。

以上の研究状況を踏まえて、本稿は、安政度内裏遷幸に着目し、その実施の背景や空間の特性をより総合的に検討した上で、遷幸を実施する朝廷側とそれを見物する町側の対応や意図を明らかにする。

1 安政度内裏造営と遷幸の概要

安政度内裏遷幸の特徴を明らかにする前に、先行研究をもとに安政度内裏造営の概要をまとめておきたい⁶⁾。

嘉永6年(1853)4月、女院御所から出た大火は禁裏御所(内裏)や仙洞御所、そしてその西方一帯の町に広がった。孝明天皇は、下鴨神社に一旦避難した後、聖護院に仮御所を置く。その数日後には、類焼を逃れた桂宮の屋敷に遷幸し、そこに仮御所を置いた。桂宮の屋敷は、築地之内と呼ばれる内裏を中心とした九門に囲まれた区域内の北端に位置する。天明の大火後の仮御所が聖護院であったこと

* 九州大学大学院芸術工学研究院 准教授・博士(工学)

Assoc. Prof., Faculty of Design, Kyushu University, Dr. Eng.

を考えると、内裏に近接するという立地に特徴があるといえる。

内裏造営は速やかに始まり、安政2年(1854)の秋には完成し、朝廷側に引き渡される。そして、同年11月23日、内裏遷幸と内侍所渡御が行われた。

2 遷幸の空間の特性

2-1 遷幸の道筋の決定

次に、安政度内裏遷幸実施の経緯とその空間の特性を整理・分析してみたい⁷⁾。

遷幸の内慮が朝廷側から示されたのは、安政2年(1854)4月29日である⁸⁾。京都所司代の脇坂安宅宛に武家伝奏より書付が届き、孝明天皇が当年冬中の遷幸を希望している旨が伝えられる。さらに、5月11日には、関白鷹司政通から脇坂宛に遷幸に関する諸向きへの配慮が内々に示される。ここでいう配慮とは、時節を鑑みて「手数」や「市中迷惑」をかけないようにするというものである⁹⁾。これを受けて道筋の取調が行われ、同月26日にその結果が示される。ここで、その記述のなかから、本遷幸の空間的特徴を示す部分を抜粋してみたい。

【史料1】『脇坂安宅日記鈔』安政2年5月26日条(以下、史料中の下線・丸数字は筆者による)

禁裡 御所向御造畢之上、新 内裏江 遷幸之節、御道筋之儀為取調候処、(中略)、①御道筋之義寺町通者片側寺院多ニ而、表側高塀之向多 御見越之程茂難計、(中略)、寛政度ニ茂寺町通之義ニ付、別紙之通り町奉行先役菅沼下野守申聞候書留相見、御見越之向者目隠等為致候儀ニ而、場広之儀寺院之向迷惑可致哉茂難計候付相省、別紙絵図面内之 御道筋ニ有之候得者、何れ相成候共先建家取払ニ不及、辻小路曲角或者首長庇先聊ツ、切縮申付候迄ニ而、乍聊此分相応之御手当被下、其余町々木戸門并番部屋等去除、且盛砂、竹矢来、溝蓋、目隠板囲等者先例於町分申付、御入用ニ不相立、夫々町分ニ而諸雑費相掛り候事ニ而、②烏丸通中立売より丸太町迄の間東側者、多分官方、堂上方等之構ニ而、御車より御見越之程茂難計候付、其向々ニ而差支之筋無之候ハ、同通り者木戸門無之木戸柱計ニ而、番部屋等茂無数聊之雑費ニ而相済候、室町通ニ而中立売より出水北側迄の間并烏丸通中立売上ル辺焼場跡末家稀ニ而、多分板囲而已之場所ニ有之候、

一、(中略)③室町通者大体木戸門ニ而、番部屋等多分有之候付、雑費茂相増候儀ニ候得共、是等者各別之銀高ニ茂無之、中二者迷惑いたし候町柄無之共難申候得共、何れ茂 遷幸之儀者不容易候処、 御通行之 御道筋ニ相成候ハ、雑費等ニも不拘難有存、各別迷惑いたし候程之義者有之間敷、(略)

まず、下線部①では、寺町通を遷幸道筋とすることへの懸念が記される。ここで理由として挙がるのが、「御見越」である。寺院が連なる寺町通を遷幸が通行した場合、高塀が多く、「御見越」が計りたいという。

加えて、寺町通については、寛政度内裏遷幸時の評価も記されるが、下線部①で示される寛政度の書留については、次のものが該当すると考えられる。

【史料2】『遷幸御用留』(内閣文庫所蔵)

戊六月二日

寺町通御道筋之儀ニ付申上候書付

菅沼下野守

禁裏

遷幸御道筋仮

皇居東六門代より岡崎村廣道南江三条通西江寺町通北江武家町口御門より

入御相成候積御道筋絵図老枚入御覧候、然ル処寺町通之儀者片側寺院多ニ而高塀取建候而茂御見越之御程合茂難斗、其上武家町口御門之儀者御門明幅狭御車入兼申候、右御門一昨春出火之節残焼損所有之、此節御修復取掛罷在候間、弥武家町口御門ニ相成候得者、当時御修復出来之上、

遷幸之節者御門左右柱切払不申候而者、御車道ニ相成不申候、左候而者右御門二重之御修復ニ相成申候ニ付、此段申上置候、以上

六月二日 菅沼下野守

寛政度内裏遷幸は、寛政2年(1790)年11月22日に行われた。光格天皇は仮御所の聖護院から、三条通を西へ、堺町通を北へと進み、新造内裏に遷幸した¹⁰⁾。この計画段階において寺町通の「御見越」の「程合」の難しさや武家町口の門、つまり武家側が管理する寺町御門の通行が問題となっていたことがわかる。

なお、天皇の内裏遷幸のために修復が終了した寺町御門の柱を切り払わなければならない事態に対して、武家側が難色を示している。武家側には遷幸という儀礼が朝廷側のものであるという認識があり、過大な負担への忌避感があったと考えられる。

では、なぜ、このような問題点が寛政度に提示されていたにもかかわらず、安政度も寺町通の通行が検討されたのであろうか。それを明確に示す史料はないが、寺町通が近世の朝儀で使用されていたことは注目に値しよう。その一例が、天皇の葬列(葬送)である。18世紀中葉まで、崩御した天皇や女院は御車に載せられ、各御所から築地之内を抜け、寺町通を通過して泉涌寺まで運ばれる¹¹⁾。ただし、安永8年(1779)の後桃園天皇の葬列は、南門通を西へ、烏丸通を南へ、三条通を東へ、さらに寺町通を南へ進み、泉涌寺に向かった¹²⁾。その後の天皇・女院の葬列も、築地之内を出た後は堺町通、烏丸通、もしくは室町通を南下し、三条通を東行し、寺町通を南下した後、五条通を通過して泉涌寺に至る¹³⁾。すなわち、寛政度ならびに安政度遷幸の経路決定に際しては、他の朝儀と同様に先例が参照される過程で、まず旧例として安永度以前の天皇葬列で使用された寺町通の通行が検討され、続けて【史料1】下線部②以下のように安永8年の天皇葬送度以降に使用されていた烏丸通や室町通の通行が検討されたのであろう¹⁴⁾。なお、この「御見越」の内容については、2-3にて詳述する。

そして、【史料1】下線部②以下では、寺町通以外の具体的な道筋として、烏丸通等の通行の問題等が検討される。烏丸通に関しては、中立売通から丸太町の間は堂上方などの屋敷が多く、木戸門も少ないため、その撤去の雑費が少なく済むと評価する。一方で、室町通の中立売通から出水通の間は大火で多くの町家が類焼していたために板囲が必要とする。ただし、下線部③では、室町通は、木戸門や番部屋が多く、撤去のための雑費が増えたことを迷惑と思うかもしれないが、雑費の支出よりも遷幸を「有難」と捉えて格別の迷惑ではないとする町も多いと評価している¹⁵⁾。このような沿道

の町の評価のなかで「有難」に言及する記録は寛政度内裏遷幸時には確認できない。これは、安政度内裏遷幸の特徴といえよう。

結局、遷幸は、図1のとおり決定される。桂皇居の西門から出た鳳輦は、今出川御門から築地之内の外へ出た後、今出川通を西へ、室町通を南へ、三条通を東へ、堺町通を北へ行き、堺町御門を通過し、仙洞御所の西を通り、南門(建礼門)、承明門から内裏に還る¹⁶⁾。

2-2 沿道の整備

遷幸の道筋決定後の安政2年10月14日、奉行所立合のもとで実地の見分が行われた。『職修日記』(宮内庁書陵部所蔵)や『遷幸御用留』(内閣文庫所蔵)に記される結果をまとめたものが、表1である。通路幅拡張のための高堀などの後退や町家の底の取払が必要とされた箇所と御手当銀の額が判明する¹⁷⁾。

また、沿道の町にはさらなる対応が求められた。ここで、京都市歴史資料館所蔵の『蛸薬師町文書』から、その具体的な内容を確認してみたい。

蛸薬師町は室町通を挟む両側町で、北側を二条通、南側を押小路通に囲まれる。近世には三井八郎右衛門のほか、淀藩呉服所伊勢屋や播州藩呉服所桔梗屋、長崎糸割賦商人らが居住した町である¹⁸⁾。

安政2年10月15日、西御役所から道筋にあたる同町に御請書が届けられる¹⁹⁾。

【史料3】「新内裏遷幸道筋につき蛸薬師町諸事要用録」(『蛸薬師町文書』)安政2年10月15日条

御請書

- 一、蒔砂 巾式間半 厚壹寸
- 一、竹矢来 辻方式間入込壹ヶ所 町堺際ニ而壹ヶ所
但し丈夫成門有之処者竹矢来一ヶ所可仕旨
- 一、御見込町々家表側辻方三間見世入込之分取払
- 一、町家表両側見世并孫庇駒寄せ取払
- 一、町家表御札箱庇之上看板并雨覆屋根堅樋等取払
- 一、二階窓塞ぎ難取払表格子并むしこべ切可申候
- 一、町々有之車除石取除
- 一、町家表両側溝ふた并伏樋石橋等丈夫ニ取繕不陸石高之処御道造可仕候

- 一、町家表両側ニ出有之候材木古木古板竹類取払
- 一、同表側張紙落書類取払
- 一、同表側壁并土蔵損

所之分取繕家居透間之

処囲ひ可申事

- 一、石仏辻堂髪結床番
部屋木戸門階子懸芥溜
等取払

一、都而表通御目障無
之様仕御見越ニ相成場
所ハ高サ式間之目隠可
仕候

- 一、屋根ニ有之候火之
見水溜其外風印等取払

木戸門や辻堂の撤去や蒔砂や竹矢来などの設置のほか、各町家の底や看板などの撤

図1 安政度内裏遷幸道筋
(網掛けの範囲は、嘉永7年の火災で延焼した町の範囲(築地之内の範囲のみを表示)。丸囲み数字は表1と対応。)

表1 安政度内裏遷幸実地検分結果一覧

図1番号	場所	土地建物名	箇所	対応	御手当銀額	典拠(※)	備考
①	伏見宮邸		高堀三間	引入		『職修日記』	
②	今出川通相国寺門前通北西	御附武家組屋敷	北一間 西一間半	取払		『職修日記』	
③	今出川通烏丸西入町北側	町家	底不残	取払	719匁3分5厘	『遷幸御用留』	
④	今出川通烏丸西入町南側	町家	底不残	取払	574匁6分9厘	『遷幸御用留』	
⑤	今出川室町東南角	若狭屋喜兵衛建家	一間五分 底 三間五分 出格子	取払	67匁9分5厘	『遷幸御用留』	『職修日記』では東へ1間南へ1間取払
⑥	一条室町北西角	丹波屋茂兵衛建家	桁行一間半 梁行一間 (建坪一坪五分)	取払	72匁8分1厘 (1坪あたり48匁5分4厘)	『遷幸御用留』	
⑦	一条室町上ル東側	(板囲)	一間余構内へ	引入		『職修日記』	
⑧	一条室町東南角	町用人安兵衛建家	桁行二間 梁行一間 (建坪二坪)	取払	97匁8厘 (1坪あたり48匁5分4厘)	『遷幸御用留』	
⑨	室町御池南西角	松屋伊兵衛	底 一間三分 六分一厘 出格子一箇所	取払	26匁4分5厘	『遷幸御用留』	『職修日記』では底1間取払
⑩	三条烏丸南西角	日野屋直七	底 五分 七分七厘 (坪三分八厘)	取払	9匁2分2厘	『遷幸御用留』	『職修日記』では底中物入取払
⑪	三条東洞院南西角	松屋次兵衛	底 二間 七分七厘 (坪一坪四分四厘)	取払	37匁3分7厘	『遷幸御用留』	『職修日記』では西へ1間南へ1間取払
⑫	三条堺町北西角	近江屋松之助建家	一間半 一間 (建坪一坪五分)	取払	72匁8分1厘 (1坪あたり48匁5分4厘)	『遷幸御用留』	『職修日記』では北へ1間西間半取払

※『職修日記』(宮内庁書陵部所蔵)、『遷幸御用留』(内閣文庫所蔵)

去や二階窓や虫窓の締切などの景観の整備が重点的に指示されている。これらは通路幅の拡張と遷幸空間の荘厳、さらに見物の規制を目的としたものであり、先行研究で指摘される天皇や上皇の通行時の対応と共通する部分も多い²⁰⁾。

ただし、火災後の遷幸においては、【史料3】に記されるように、壁や土蔵の破損箇所や家の隙間への囲いや、「御目障」がないように「御見越」になる場所への目隠し、などが必要とされている点は注目しておきたい。

特に、火災発生から1年半弱では、室町通の出水通以北の町では、町家が建ち並ぶ状況にまで至っていなかったのであろう。『遷幸御用留』には、遷幸沿道で「取葺屋根」や「板囲」が設置された箇所が示されている。そのなかから被災した一条通と中立売通間の様相を図2に示す。この地区では沿道の面積の約7割に高さ2間の「取葺屋根」が設置されたことがわかる。この「取葺屋根」の内容は示されていないが、図2にはすでに家が建っている箇所に別記がある上に、『日本国語大辞典』（小学館）によれば「取葺屋根」とは粗末で仮設的な屋根を意味することから、ここでは「取葺屋根」を目隠しとなるような高さ2間の粗末な屋根の仮設的な構築物であったと判断しておきたい²¹⁾。

すなわち、内裏への遷幸時には、葬列や行幸などの先例に準じて、しつらい、荘厳、さらに通路幅の拡張のための対応がなされるだけでなく、不都合な箇所を隠し、さらに延焼した地区を仮設等で補った景観が整備されていたことになる。

2-3 「御見越」と遷幸の空間

では、経路決定や町並の整備の理由として度々取り上げられる「御見越」とは、何を指すのであろうか。

【史料1】の記述等を総合的に判断して、ここでは、天皇の上覧を指すと考える。ただし、その上覧の内容については、【史料3】に

図2 安政遷幸道筋における仮設・板囲の事例 (典拠 『遷幸御用留』(内閣文庫所蔵))

の神聖性や清浄性を必要とされていた点は注意しておきたい²²⁾。例えば、【史料1】下線部①で、寺町通では「御見越」の程が計りがたいとする。寺町通沿いには寺院が多い。高塀があるとはいえ、寺院にある穢に関連するものが存在する可能性がある。墓地などが見えてしまうような事態は、避けなければならなかったのであろう。

また、近世中期には、東山天皇は上御霊社の風流を禁裏御所から見ていた。しかし、その風流の築地之内への侵入が「不吉」であるという理由で、禁裏御所からの上覧は中止される²³⁾。このように、天皇や朝廷の存在に影響が想定されるようなものは、天皇の視界や周囲から排除される。

したがって、天皇が町中を上覧する遷幸という朝儀時には、清浄たるべく天皇の存在を安全に確保するに不都合のある要素等が取り除かれた空間が都市のなかに創出されていたといえよう。

3 遷幸の目的と背景

最後に、安政度内裏遷幸の特性を明らかにするため、遷幸を実施する朝廷側の意図、ならびにそれを受け入れる町や町人らの対応を考察しておきたい。

3-1 朝廷側の遷幸の目的

公家や武家の記録において、内裏への遷幸は「御行粧」と表記される場合がある²⁴⁾。行粧とは、旅や外出のよそおい(威儀をととのえること)を示す²⁵⁾。天皇が遷幸するためには、その威儀を整え、見せるための演出が必要であったことが認識されており、このような表現が用いられていたのであろう。実際、禁裏御所の正式な門である南門(建礼門)²⁶⁾を通過する点や天皇の乗物として八葉御車ではなく鳳輦が使用された点²⁷⁾などは、正統かつ優位的な天皇の存在を示すための対応であったと評価できる。

さらに、安政度の場合、幕府が内裏造営に対して身元宜しく裕福とされた町人から献金を求めた点は留意しておきたい²⁸⁾。前掲牧論文に付される献金者一覧を分析すると、遷幸の道筋に居住地があったものも少なくないことが分かる。したがって、朝廷側・幕府側ともに献金した町人に対しての新造内裏への遷幸の披露を意図していた可能性は否定できない。

以上から、朝廷側は天皇の威儀、つまり正式な内裏に遷幸すべき正統かつ優越的な天皇の存在を町にむけて披露することを目的のひとつとしていたと考えられる。

3-2 町側の対応の背景

一方、町側に目を向けると、前述のように様々な規制やしつらえを求められる一方で、利点もあった。

そのひとつが、拝見である。前述のとおり、遷幸当日だけでなく、その前日から多くの見物人が集まっていた。遷幸前夜には道筋の各家の前(家並)に行燈が置かれ、道筋約50町に少なくとも松明1750本が設置されていた²⁹⁾。人々は華やかかつ荘厳な雰囲気包まれた都市空間を楽しんでいたのであろう。

そのなかで、沿道の町家では拝見場所の賃料を取る商売が成立していた。『蛸薬師町文書』所収の前掲「新内裏遷幸道筋につき蛸薬師町諸事要用録」には、町触の写しが残る³⁰⁾。ここでは、拝見の規制などが記されるとともに³¹⁾、「拝見場所賃料等取候族に有之者急度可申付条、所之もの共へ心を付可申候」とある。拝見場所を借りた人々にも拝見の規則を伝えることが言い渡されたものであるが、換言す

れば、拝見の場所の賃料を取る事例があったことになる。

しかも、この拝見場所は既存の町家だけでない。

【史料4】『遷幸御用留』安政2年9月

一、御道筋之内室町丸太町上ル西側鷺尾家飯館前江茂、同様御差出有之候儀与存候、且室町中立売東南角ニ長橋局下り屋敷尾辻焼失跡江若仮建物ニ而茂被取建候哉、又者囲ニ而茂補理候哉、承知いたし度、尤囲被致候事ニ候ハ、御組之もの者不被差出儀与存候得共、仮建物出来拝見被致候儀ニ候ハ、是又御組之者被差出候儀与存候、且又三条通東洞院東入北側に曇華院殿拝見有之不見透様、夫々被取斗方其筋江御掛合候上、否被御申間候様ハ多し度存候、

前述した遷幸道筋沿いの仮設のなかには、拝見ができるような場所もあったのであろう。かかる場所が賃料を取っていたかは定かではないが、いずれにせよ、遷幸は、町人が経済的な利益を得る機会となっていた。

また、拝見については、沿道の町内でさらに詳細な申し合わせがあった。

【史料5】『永書』（三井文庫所蔵）安政2年11月

御遷幸ニ付当町内家並ニ張紙之間左之通、

申合之事

一、御遷幸之節平伏可仕事

一、無言者勿論無礼無之候様相慎可申候事

「（註 押紙）老人小児拝見庭所ニおいて別而無礼無之様相慎可申事」

一、火之元別而入念可申事

一、庭先拝見中火鉢田葉粉盆無用之事

一、毛遷蒲団等之敷物無用

一、庭先ニ而弁当無用之事

一、禁酒之事

一、男女かむりもの無用

一、御当日前夜共高声者勿論無益之雑談并騒敷致間敷事

一、前夜方表二階上り申間敷事

一、拝見後町分方致沙汰候追追出之儀者無用之事

右之通急度相心得可申事

十一月 町役

「高声」に加えて、弁当や酒やたばこが禁止されている点は興味深い。前述の賃料との関連性は不明であるが、拝見時に飲食や遊興を兼ねる慣例があったのであろう。

ただし、このような行動は、場所代といった一時的な経済利益や遊興だけを目的としたものではない。特に、沿道の有力町人のなかには、重要な接待の機会として活用するものもあったと考えられる。

三井文庫所蔵「拝見頼来候諸家方人数」³²⁾からは、遷幸の沿道にある冷泉町等に屋敷を構えていた豪商の三井家に大勢の人々が拝見を申し出ていることがわかる。しかも、この史料には「加州御屋敷」（加賀）5人、「鴻池善五郎様」8人、「松平伊豆守様」12・3人、「二条様」31人など、武家や上層町人の代表者氏名と拝見希望人数が記されており、幕府や禁裏御用もつとめていた三井家と経済的・社会的な交流があったと推測される人々が拝見を希望していたことが判明する³³⁾。他にも、所司代用人や久留米藩屋敷などの武家、大工などの町人らも記されているが、この史料からだけでも、総勢300人

以上が三井家での拝見を依頼していたことがわかる。これに対して三井家が受け入れた人数は明かではないが、多くの来賓があったことはまちがいないであろう。

そして、三井家では、遷幸当日は朝から清掃などをした後、あらかじめ家内で決められた役割のもと、万全の体制で遷幸拝見の客人を迎え、飲食のもてなしを行った³⁴⁾。

このように、朝廷や幕府からの要求を受容できるだけの社会的基盤を持ちうる町や有力町人らにとっては、遷幸は単なる経済的負担を伴う朝儀というだけではなく、自らが所属する社会的ネットワークを確認・形成する重要な機会でもあった。

加えて、さらに身分の高い人を接客する場合には、迎える側にも相応の対応が求められた。【史料4】では門跡である曇華院が見物するために「不透」の工夫が求められている。また、『蛸薬師町文書』には「一、西本願寺様町内誉田屋仁兵衛方へ拝見御成ニ付、町内為御御挨拶鶴齡被申銘酒壺斗ト頂戴仕候、」³⁵⁾とある。このように、身分の高い人々のもてなしができるだけの経済力・社会力を保持した町人にとっては、貴人を迎え入れることができること、つまり自らの社会的地位の高さを他者に主張できる機会でもあったのである。

おわりに

安政度内裏遷幸は、遷幸時に必要とされる諸対応を迷惑としない町が多いと評価された室町通を通行する経路が選択された。さらに、この経路決定や沿道の景観整備で重視された要素に、「御見越」がある。遷幸には天皇の上覧に適した景観が必要とされ、特に沿道の町にはそれに準じた仮設の設置等が求められた。

そして、その空間を舞台に、朝廷側は、天皇の威儀、つまり鳳輦に載って南門から内裏に入る正統かつ優位的な天皇の存在を主張しようとした。

一方、町側では、この遷幸を負担として受け入れただけではない。町人らは遷幸を沿道の町で拝見した。そのなかでも、沿道に居住する有力町人らは、公家、武家、上層町人、門跡や門主などを拝見のために家に招いた。彼らは、この遷幸を通して、社会的ネットワークを確認・形成するとともに、社会的地位を主張しようとしていたと考えられる。

なお、遷幸という祝祭・朝儀が円滑かつ盛大に実施できた背景には、京都の町や町人の経済的・社会的な力があったことは強調しておきたい。しかも、経路決定における室町通沿いの町の評価からもうかがえるように、かかる町の力を幕府だけでなく朝廷側も把握・活用しようとしていた点は、近世後期の京都の特徴ともいえよう。

最後に、今後の研究展望を記しておく。安政度内裏遷幸の場合、天皇は本稿で指摘したような経路で内裏に遷った。一方、遷幸と同日には、桂皇居にあった内侍所（神鏡）が新造内裏に移された。ただし、この神鏡は、惣門の外に出ることなく、築地之内を通って内裏に移った³⁶⁾。つまり、天皇と、神聖な天皇の存在を象徴し清浄であることが厳密に求められた内侍所³⁷⁾は、別の経路を使って内裏に遷る。この差異は、安政度内裏遷幸だけでなく、内侍所を中心とした禁裏のありかたを考える上でも重要である³⁸⁾。よって、次稿では、内侍所渡御の意義を本稿で明らかにした遷幸の特徴を踏まえて考察することで、祝祭ならびに朝儀空間としての近世京都の都市空間の特性をさらに解明していく予定である。

注

- 1) 藤田覚「天皇 変わるものと変わらないもの」(『思想』1049、2011 年 9 月)。
- 2) 京都の町人であった高木在中の日記『幕末維新京都町人日記 高木在中日記』(内田九州男他編(清文堂出版、1989 年))には、遷幸前々日に「遷幸ニ付内見也、御所大群衆之由」、前日には「早々町々自身番相勤、夜間断。御通筋多人数ニ而大混雑也。」と記される。
- 3) 天皇の遷幸や葬送の道筋やそのしつらえに着目した研究として、小沢朝江「近世における内裏外郭門と築地之内について」(『日本建築学会計画系論文集』554、2002 年 4 月)や丸山祐未他「近世京都における貴人通行時の街路の準備行為について」(『日本建築学会大会学術講演梗概集(東海)』、2012 年 9 月)などがある。また、丸山俊明「武士を見下ろしてはいかなかったのか」(『京都の町家と町なみ-何方を見申様にする事、堅仕間敷事』、昭和堂、2007 年)は、遷幸や天皇葬送時の町家の様相に着目する。これらの研究は、いずれも主に町触を根拠としている。なお、町触は、『京都町触集成』第 1 巻-別巻 2(京都町触研究会編、岩波書店、1983-1989 年)に所収される。以下、本稿においては、『京都町触集成』を『町触』と表記する。
- 4) 近世災害研究会編『立命館大学グローバル C O E プログラム 歴史都市を守る「文化遺産防災学」推進拠点 平成 22 年度報告書『嘉永七年京都大火・安政度内裏造営関係史料』』(2011 年 3 月)。
- 5) 近世都市京都における祝祭空間の特性については、拙稿「近世前期の上・下御霊社祭祀行列と天皇-風流見物を中心に-」(『建築史学』61、2013 年 9 月)がある。これは、禁裏御所で実施された天皇の風流見物に着目し、禁裏御所を中心とした祝祭空間の特性とその意義を考察したものである。
- 6) 安政度内裏造営については、藤岡通夫『京都御所』(中央公論美術出版、1987 年)や平井聖他『中井家文書の研究』(中央公論美術出版、1976~84 年)を参照した。また、拙稿「寛政度内裏造営以降の内侍所仮殿の造営・下賜と神嘉殿」(『日本建築学会計画系論文集』591、2005 年 5 月)でも安政度内裏(内侍所)造営について言及している。
- 7) 本稿で用いる『脇坂安宅日記鈔』ならびに『伝奏口上留』は『立命館大学安政度内裏造営報告書』の翻刻を参照したが、使用および引用に際しては筆者が原本を確認した。また、安政度内裏遷幸の経緯については一部『立命館大学安政度内裏造営報告書』でも言及されており本稿でも適宜参照したが、本稿(本章)は空間特性や経路決定に着目してその経緯を再度整理、分析するもので、論旨・目的が異なる。
- 8) 『脇坂安宅日記鈔』安政 2 年 4 月 29 日条。
- 9) 『脇坂安宅日記鈔』安政 2 年 5 月 11 日条。
- 10) 『町触』第 7 巻、120 頁。
- 11) 近世中期の天皇・女院の葬列に関して典拠とした史料は以下のとおり。宝永 6 年(1709)に崩御した東山院の葬列については、『桂宮日記』(宮内庁書陵部所蔵)宝永 7 年 1 月 10 日条。享保 5 年(1720)の新承秋門院については、『松尾相匡日記』享保 5 年 3 月 5 日条。享保 17 年の霊元院については、「霊元院尊儀御凶事一会」(『霊元天皇実録』(ゆまに書房、2005 年)所収)。
- 12) 『禁裏執次詰所日記』安永 8 年 11 月 15 日条(『後桃園天皇実録』(ゆまに書房、2006 年)所収)参照。
- 13) 安永 8 年以降に行われた天皇・女院の葬列の経路に関して、典拠とした史料は以下のとおり。天明 3 年(1783)の盛化門院に関しては『野宮定業日記』(宮内庁書陵部所蔵)天明 3 年 11 月 13 日条。寛政 7 年(1795)の恭礼門院ならびに文化 10 年(1813)の後桜町院に関しては、『町触』第 7 巻(364 頁)ならびに第 9 巻(288 頁)。天保 11 年(1840)の光格天皇ならびに弘化 3 年(1846)の仁孝天皇に関しては、『野宮定功日記』(宮内庁書陵部所蔵)天保 11 年 12 月 20 日条ならびに弘化 3 年 3 月 4 日条。
なお、近世の天皇葬送儀礼と葬列空間の特性については、別稿にてその詳細を考察する予定である。
- 14) 同時期の武家・朝廷の経済的状况に関しては、前掲拙稿「寛政度内裏造営以降の内侍所仮殿の造営・下賜と神嘉殿」でも言及するとおり、厳しかった。ゆえに、安政度内裏遷幸においても、寛政度と同様に武家側や寺院側の経済的な負担も勘案された可能性も高いと考える。
- 15) 『蛸薬師町文書』「新内裏遷幸道筋につき諸入用留帳」ならびに『京都冷泉町文書』「八三〇 安政二年十二月 御遷幸諸入用書拔」(京都冷泉町文書研究会編『京都冷泉町文書』第 6 巻、1998 年)から、図 2 に示した蛸薬師町では銀 3 貫 343 匁 7 分 6 厘、冷泉町では 3 貫 56 匁 7 分 9 厘が町の入用であったことがわかる。また、両町ともに金銭借用の記録はない。ただし、冷泉町の場合、同時に不用品が売り払われており、この臨時の入用を捻出するための対応であった可能性が考えられる。
- 16) 遷幸の道筋は、『町触』第 12 巻(204 頁)などに示される。なお、鈴木栄樹氏は、安政度遷幸の道筋決定の最大要因を八葉御車や鳳輦が通るための道幅

- の確保の問題と指摘する(鈴木栄樹「嘉永七年京都大火と安政度内裏造営-「脇坂安宅日記鈔」「禁裏炎焼一件」を中心に-」(前掲『立命館大学安政度内裏造営報告書』))。しかし、鳳輦が通るために必要な道幅は三間程度とされる。築地之内や寺町通であれば、この道幅の確保はむしろ容易である。
- 17) ただし、この御手当銀の使途は不明である。
 - 18) 『京都の地名』(平凡社、1979 年)参照。
 - 19) この御請書と同じものの内容の文書が、冷泉町(位置は図 1 参照)に屋敷を構えていた三井家にも残っている(『申合之事(御遷幸拝見ニ関スル申合)他一式』「御道筋修覆及掃除方達之請書控」(三井文庫所蔵))。
 - 20) 註 3) 参照。
 - 21) これらの板囲等の高さは、【史料 3】に示される、沿道で御見越」の可能性がある箇所で見障りな場所に据えられた板囲の高さと一致する。
 - 22) 拙稿「天皇の葬送儀礼と近世都市京都」(『特別研究[若手奨励]・4 都市建築史的観点からみた中央と地方に関する研究』(日本建築学会、2010 年 3 月))参照。
 - 23) 前掲拙稿「近世前期の上・下御霊社祭祀行列と天皇-風流見物を中心に-」。
 - 24) 安政度内裏遷幸時の「遷幸御行粧」「御行粧」という表記は、前掲『遷幸御用留』所収の安政 2 年 7 月 3 日条の浅野中務少輔の書付や『勢田章甫筆記』安政 2 年 11 月 23 日条(前掲『孝明天皇紀』所収)などで確認できる。
 - 25) 『日本国語大辞典』(小学館)参照。
 - 26) 禁裏御所内の門の性格については、前掲小沢「近世における内裏外郭門と築地之内について」のほか、前掲拙稿「近世前期の上・下御霊社祭祀行列と天皇-風流見物を中心に-」でも指摘している。
 - 27) 遷幸計画当初は、天皇の乗り物として八葉御車の使用が検討されていたが、鳳輦に変更された。この経緯については、前掲鈴木「嘉永七年京都大火と安政度内裏造営-「脇坂安宅日記鈔」「禁裏炎焼一件」を中心に-」に詳しい。
 - 28) 安政度内裏造営に関する京都の町人の献金の概要や特徴については、牧知宏「安政度内裏造営における京都町人の献金について」(前掲『立命館大学安政度内裏造営報告書』)に詳しい。
 - 29) 『安政二年遷幸内裏覚書』(宮内庁書陵部所蔵)安政 2 年 11 月の「仮皇居南殿代階下新内裏南殿階下迄凡道法五拾町之積」から、松明の数が判明する。1 町 1 人に 10 本ずつで葭のみであれば合計 3500 本、1 町 1 人 5 本ずつで葭と竹を混合すれば合計 1750 本、が計画されているが、本記録にはどちらが実施されたか明記されていない。なお、平田職修の日記『職修日記』(宮内庁書陵部所蔵)には松明の数として後者(1750 本)が記されている。
 - 30) 前掲『蛸薬師町文書』所収「新内裏遷幸道筋につき蛸薬師町諸事要用録」の触の写しは、『町触』第 12 巻(204 頁)と内容が一致する。
 - 31) 前掲丸山俊明論文(註 3)参照)において、拝見の場となった町家の特徴が指摘されている。
 - 32) 『申合之事(御遷幸拝見ニ関スル申合)他一式』(三井文庫所蔵)所収。
 - 33) 三井家の動向については、三井文庫編『三井事業史』(三井文庫、一九八〇年)や賀川隆行『近世三井経営史の研究』(吉川弘文館、一九八五年)に詳しい。また、拙稿「近世京都の都市空間再生と禁裏御所普請-三井家と町-」(『特別研究[若手奨励]・8 国際的・都市史的観点からみた都市再生論に関する研究』(日本建築学会、2012 年 3 月))で、三井家の禁裏御所普請に関する御用と新造内裏拝見に言及している。
 - 34) 前掲『申合之事(御遷幸拝見ニ関スル申合)他一式』による。家内の役割として、「御屋敷方 新二階」、「町内出役」のほか、台所での「餅焼方」、「諸道具洗い役」などが記される。
 - 35) 前掲「新内裏遷幸道筋につき蛸薬師町諸事要用録」安政 2 年 11 月 22 日条。
 - 36) 「日時勘文御用記」(『孝明天皇紀』第二(有隣堂、1967 年)所収)。
 - 37) 近世の内侍所の性格については、前掲拙稿「天皇の葬送儀礼と近世都市京都」を参照されたい。
 - 38) 近世の内侍所の動向に関しては、筆者の一連の研究に詳しい(「近世内裏内侍所仮殿下賜と上・下御霊社について」(『日本建築学会計画系論文集』575、2004 年 1 月)、「近世禁裏御所と都市社会-内侍所参詣を中心として」(『年報都市史研究』15、2007 年 12 月)など)。

【附記】本稿は、日本建築学会都市史小委員会シンポジウム「都市と表象」シリーズ「消費と生産」(平成 24 年 12 月開催)において「権威と消費-安政度内裏遷幸と町」として発表した内容を、大幅に加筆・修正したものである。また、本稿は、科学研究補助金(基盤研究(C)課題番号 22560640、研究代表者 岸泰子)による成果の一部である。

(2013 年 6 月 10 日原稿受理、2013 年 9 月 24 日採用決定)